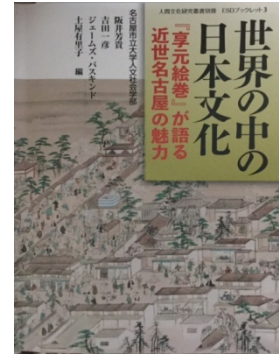


『享元絵巻』が語る近世名古屋の魅力

写真は名古屋市立大学人間文化研究叢書別冊 ESD ブックレット。標題は本書『世界の中の日本文化』の副題である。編者の一人、元同僚の阪井芳貴さんから昨年 11 月下旬に書評を頼まれた。本を送ってもらい手にとると、写真の美しい表紙に惹きつけられた。表紙に続いて、8 ページにわたり、カラー刷りの口絵『享元絵巻』が掲載されている。口絵をじっと見ているだけで、近世名古屋に引き込まれるようであった。



本書は近世名古屋の魅力を『享元絵巻』から探り、名古屋市立大の「世界の中の日本文化」という講義の実践記録でもある。書評を安請け合いしたが、なかなか難解な仕事だ。書評準備の一環として、まず本書編者の土屋友里子さん、吉田一彦さんの記述から近世名古屋を語る『享元絵巻』について紹介しておきたい。

第 8 代将軍徳川吉宗による享保の改革によって、世の中が儉約と節制に沈んでいた時、名古屋は正反対の明るさと活気を呈していた。それは当時の尾張藩第 7 代藩主徳川宗春の政策によるものであった。名古屋の街には芝居小屋が立ち並び、三箇所遊郭を併設、花火が頻繁に打ち上げられ、祭りや盆踊りが奨励された。この徳川宗春の治世下であった享保 16 年(1731)から元文 4 年(1739)間の、繁栄した名古屋の街を描いたのが『享元絵巻』である。

『享元絵巻』は尾張藩重臣石河家に伝来し、現在は名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所に所蔵されている。紙本着色、縦 56.5 cm、横 372cm の長い巻物一巻である。通常絵巻と言うと、絵画部分と詞書(文章)部分が交互に表れるものを想像するが、『享元絵巻』に詞書はなく、豪華絢爛な絵画一色で占められている。絵巻というよりはむしろ『洛中洛外図屏風』や『江戸図屏風』にならぶ風俗画、屏風と言った方が適切かもしれない。収納されていた桐箱の蓋裏には「絵記」と記されており、当初から「絵巻」と呼ばれていたかどうかはわからない。原本は保存の問題もあり一般に目に触れることは難しいが、名古屋市博物館に忠実な複製本が所蔵されている。原本の制作年代は不明であるが、江戸時代中期とされている。

この絵巻には、実に様々なものが描かれているが、とりわけ目立つのが寺と神社である。画面の中央部には、七寺の堂塔と境内の賑わいが大きく描かれ、そのすぐ右隣に大須観音とその参道の大混雑が描かれている。他にも多数の寺と神社が描かれている。

七寺や大須観音では、境内に芝居小屋が作られ、歌舞伎芝居や浄瑠璃が行なわれて大勢のお客が詰めかけた。境内には櫓があがり、役者や浄瑠璃の太夫の名が記された看板が掲げられている。『享元絵巻』が描く本町通、寺社、芝居小屋、遊郭、大道芸などの賑わいは、都市の文化とは何かを考えさせる象徴的な風景と評価されるだろう。

(2019 年 1 月 3 日)